



阿佐ヶ谷教会



信友会 会報

11月例会(11月25日開催)報告

「使徒言行録の学び」(第6回) 大宮 溥先生

—新約聖書 使徒言行録 第6章—

いよいよ12月も半ば、クリスマスの準備も終わり、この大切な聖日を待ち望みながら心静かに暮らす日々でありますでしょうか。今年はその暑く長い夏だけでなく、周りを見ると様々な出来事がいつになくあった年のように感じます。願わくばそうした出来事がいくつかでも来年に続く楽しいものであることを心から願います。また寒さも厳しき折り、体調を崩さぬ様ご自愛ください。

さて11月25日に行われた信友会11月例会では、使徒言行録の第6章について、大宮溥名牧師に講解していただきました。以下の文章はその時の講義録であります。この文章も大宮先生によりまとめられたものです。丁寧なサポートを心より感謝いたします。

「使徒言行録6章の学び 原始教会の躍動」 大宮 溥先生 使徒言行録におけるエルサレム教会の成立と困難

使徒言行録は初代教会の歴史と記載したものです。今日学ぶところまでの展開を、初めに見過しておきましょう。キリスト教会は、主イエスの復活と聖霊降臨によって建設されました(1～2章)。急速に発展してゆきますが、やがて内部の軋轢と外部からの迫害によって試練にさらされます(3～7章)。

(次ページへ)



信友会は東日本大震災被災者支援チャリティーとして、夏には福島産の桃を、秋には柿を販売した。また12月には今年3回目の古本販売を行い、今回はクリスマスの絵本を中心に行った。



(前ページより)

「ヘレニステース」と「ヘブライオス」の分立と「七人」の選出 (6:1～7)

生まれたばかりのエルサレム教会に、いつのまにか「ギリシア語を話すユダヤ人」(ヘレニステース)と「ヘブライ語を話すユダヤ人」(ヘブライオス)という、二つの群れができていました。前者は外国住まいのユダヤ人(ディアスポラ=離散の民)で本国に帰って来た人々を中心とする群、後者は本国住まいの人々を中心とする群でした。これは、エルサレムの住民全体の間でそうだったのが、キリスト教会の中にも及んでいたのです。



その「ヘレニステース」グループから、彼らの仲間のやもめたちが「日々の分配」を十分に与えられていないと苦情が出されました。この分配は、初代教会が原始共産制を実施して相互扶助的であった(2:44)上に、特に「やもめ」への配慮を大切に、後には一つの身分として尊敬したと関係しています。ディアスポラのユダヤ人は、晩年は祖国のエルサレムに来て住むことを切望したので、やもめの数も多かったという想定もあります。



この苦情が使徒たちに届いたとき、彼らは「弟子たちのすべて」を招集して、自分たちの中から「霊」と知恵に満ちた評判の良い人を七人を選び出し、「奉仕(生活支援)」の任にあたらせ、使徒たちは「祈りとみ言葉の奉仕」に専念したいと、提案しました。



キリスト教会では、最初から「宣教」と「奉仕」の働きが実践せられ、後に「監督たちと奉仕者たち」bishops and deacons(フィリピ1:1)、更には「長老と執事」elders and deacons となりましたが、最初は使徒たちがそれらの働きの全部を取り仕切っていたようであります。



ペトロは、使徒と執事の職制の分離を提案しました。しかし使徒言行録のこの後の記述では、ここで選出された7人が「執事」に限定された職務を担ったかどうかは、不明であります。



ここで教会の選挙について一言述べておきます。選挙というと、自分たちの代表を選出することと考えられがちです。しかし教会の選挙で大切なのは、自分たちの中でその務めに誰がふさわしいと神さまがお考えになるだろうかと考慮して、その神の御心に従う行為なのであります。

教会の役職の数が「七」であるのは、7が12と並んで完全数であり、旧約以来の前例があったからであります。ここで挙げられた7人の人たちは、ニコラオ(異教徒からの改宗者)以外は「ヘレニステース」であったと思われます。役職への任職は、民の選挙と同職者たちの按手によって行われました。按手は聖霊の賜物の分与の行為であります。

このようにして宣教を中心とする「職制」の整備によって、教会の成長が促進されたのであります。

ステファノの逮捕 (6:8～15)

「さて、ステファノは恵みと力に満ち、すばらしい不思議な業としるしを民衆の間で行っていた」(8節)。ここではステファノは「執事」としての働きについては



述べられず、専ら神の力の証人また伝達者として描かれています。これは 8 章以下に出て来るフィリポについても同様で、実質的には「ヘレニステース」の伝道者として活動しています。

エルサレム教会の信徒の内、「ヘブライオス」はユダヤ教の伝統的な宗教行事に忠実に参与し、神殿礼拝も欠かさなかった(3:1)が、「ヘレニステース」は、後に 15 章の使徒会議で論じられるように、主イエスの神殿批判、律法批判を受け継いで、ユダヤ教の伝統に



批判的な傾向が強かったと思われる。そこから「ヘレニステース」のユダヤ教徒とキリスト教徒との間で論争が生じ、それが「ヘブライオス」のユダヤ教徒たちにも広がって、暴動と裁判になったのでありましょう。

ステファノと議論した「キレネとアレキサンドリアの出身者で、いわゆる『解放された奴隷の会堂』に属する人々(9 節)というの、『キレネとアレキサンドリア』は地中海岸のアフリカの都市、「解放された奴隷(リベルテン)』とは、クリソストモスによると、ポンペイウスが捕縛した戦争捕虜が奴隷としてローマに連行され、後にその子孫たちが解放されてエルサレムに住むようになったのを指しました。「キリキヤ州とアジア州」は、今のトルコで、パウロはキリキヤ州のタルソの出身でありました。

彼らはステファノと論争して「歯が立たない」(10 節)相手と知ると、人々を扇動して、ステファノが「モーセと神」を冒瀆したと訴え、暴徒に彼を襲わせ、彼を裁判にかけて、葬り去ろうとしました(11～12 節)。ここには暴徒によるステファノ襲撃と、「最高法院」(12 節)(70 人議会で、ユダヤ人の最高議決機関)における裁判が記されていますが、この 2 つが別々に行われたのか、一方から他方に移ったのかははっきりしません。ここでステファノが「モーセと神を冒瀆する言葉」を語ったと非難されていますが、8 章におけるステファノの弁明では、モーセに対して深い尊敬が払われています。事実でなく言いがかりだったわけです。

13～14 節にステファノに対する訴訟の陳述がなされていますが、ここだけでなく使徒言行録に記録されているステファノの言葉と行動は、イエス・キリストのそれと非情に似ています(特にステファノが最後に「主よ、この罪を彼らの負わせないでください」<7:60>と祈るところは、主イエスに生き写しです)。主イエスは神殿の崩壊を語られましたが、御自分が神殿を破壊すると言われたのではなく、「神殿が破壊される日が来る」(神の審判として)と言われたのであります。また安息日等の律法批判も、神の言葉としての律法の精神からの批判でありました。ステファノもその態度を受け継いだのであります。

使徒言行録 6 章はここで終わりますが、ここから 7 章にかけて展開するステファノの裁判と処刑から、エルサレム教会に対する大迫害が起るのでありますが、これがきっかけとなって、キリスト教がサマリアから地中海世界へと伝播して行き、世界宗教そして広がるのであります。ステファノを処刑した人々の衣服をあずかっていたサウロ(後のパウロ)が回心し、後にビシディアのアンティオキアを拠点として地中海伝道が展開します。キリスト教が世界宗教として出発した最初の種はステファノによって蒔かれたと言えるでしょう。

(2012 年 11 月 25 日)

(例会司会：打方 書記：玉澤 写真：小笠原・松田 会報レイアウト：小野)





主題講演後、日高兄の指導で来年1月13日に行われる音楽集会「さんびのよろこび」に向けて、讃美歌第41番「主はわがかいぬし」と第182番「丘のうえに十字架たつ」を男性4部合唱で練習した。

誕生月には主日礼拝と信友会例会にもご参加ください。